

日本らしい都市の創生

三三〇二字

寺島でございます。

私の立場は、ニューヨークに四年半、それからワシントンに六年半生活して帰ってきたということで、今回議論されております政治と経済の機能が二つの町に分離した場合ということで、そのどちらの町も体験したということが一つの視点となつて、これから申し上げるような発言につながっているというふうに御理解いただきたいと思ひます。

平成二年の決議から十二年たっているわけでありませうけれども、その間の経年変化といひますか、一体何が基本的に変わったのかということに関連してまず話を始めたいと思ひます。お手元に配付してあります意見書、大体それに沿つて発言したいと思ひますので、それをごらんになつていただければと思ひます。

この十二年間で何がどう変わったかということでありませうけれども、平成二年の決議といひるのは、バブル期の日本を背景にして、まだまだこの国はやれるといひある種の夢といひますか、野望といひますか、明らかにそういうものがまだ盛り上がつていた時代を背景にした決議だつたらうと思ひます。

ただし、現在、御承知のように、縮む日本といひますか、デフレスパイラルのような状況の中で、財政の悪化を背景にして、公共投資資金般の見直し論といひものが国民の大きな関心といひることになつ

ている状況下で、この点がまず大変大きな平成二年時との背景の違いであるといひことは、もう間違ひないと思ひます。

それからもう一つ、十二年前と比べて、IT革命と言われるいわゆるネットワーク技術革命の進行といひことと、経済のグローバル化といひものが加速度的に進行しているといひのが、多分大きな違ひだらうと思ひます。

それから三番目には、阪神・淡路大震災といひ体験を経て、やはり都市における集積といひものの危険を味わつたといひますか、さらに、昨年、ニューヨーク、ワシントンと、九・一一といひ事件に襲われて、これまた安全性といひますか、そういう問題意識をいひやが上にも持たなければいひけないような情勢の変化といひものが起こつたわけでありませう。

それから、さらに四番目に、これはまさにこれからといひことなんどすけれども、二〇〇六年をピークといひまして、日本の人口が大きく、いわゆる人口構造の成熟化といひ局面に入つていく、二〇五〇年に向けて平均六十万入らず人口が減るといひサイクルに入つていひつて、一億二千七百万をピークにして、二〇五〇年にはよほどの変更要素がない限り一億人に収れんしていくだらうといひ大きな環境の変化といひがあるわけでありませう。今まで五十年、日本は人口が五千万ふえるといひサイクルの中で走つてきたわけでありませうけれども、極端な移民政策への転換とか、そういうことでもない限り、二〇五〇年までには少なくとも二千七百万人ぐらいの人口が減つていくのではないかといひサイクルの中に入つていく、こう

いう認識が多分重要なんだろうというふうに思います。

そういう中で、私は、それらの経年変化、十二年間の我々の環境認識の変化というものを背景にしても、なおかつ、私の主張として申し上げたいのは、二十一世紀の新しい日本のパラダイムを創造するプロジェクトが重要であるという論点を大事にしていきたいというふうに思っております。

海外で動いていますと、一体日本はどういう国をつくらうとしているのかという質問を受けることがありますけれども、非常にメッセージ性の高い、どういう国を創造しているのかということを明確にしたシナリオというのが今こそ問われている。私は、大型公共投資のプロジェクトとして首都機能移転などというものに期待するのであるならば、その種の議論にも賛同する気は一切ないわけでありませうけれども、新しい日本を創造していくための引き金といえます。すかトリガーとなるような、新しい日本のプラットホームになるような構想としてこの首都機能移転というプロジェクトを推進していくことには歴史的な意味があるというふうに感じております。

そこで、私が議論していますのは、創造的首都機能移転論というものでもあります。

どういう意味で価値創造的なプロジェクトというものが必要かということなんでありませうけれども、明治以来の日本のパラダイムを転換するために、ここに書いてある幾つかのキーワード、時間をとって説明する余裕がございませんけれども、例えば、新しい首都機能の集中した場を環境保全型の実験都市と位置づけて、世界じゅう

の環境保全型技術を注入して、エネルギーの利用効率とかCO₂の排出とカリサイクル等において先駆的な試みを行う場とするということ。

あるいは、住環境整備の実験都市と位置づけて、公務員住宅のスペックを二十一世紀の日本人が住むにふさわしい都市として建設する。例えば、一戸当たりの公務員住宅のスペースを倍増し、集中冷暖房給湯を完備し、せめて駐車場ぐらい完備しているようなスペックにする。そういうことによつて、衣食住の中で住環境だけがまだ国際社会の中でかなり劣勢にある、特に、東京を中心にした住環境が劣勢であると私は思っていますので、国家公務員住宅のスペックをこういう形でもって設計してみる。あるいは、残された東京の公務員住宅の跡地を再開発することによつて、東京圏の住環境整備の引き金を引くようなプロジェクトとしていく、そういう視点も必要なのではないかというふうに思っています。

それからさらに、国際中核都市というキーワードをここで使っておりますけれども、要するに、行政と政治だけが集中した都市というだけではなくて、無味乾燥な政治都市にしないためには都市としての付加価値が非常に問われる。その際に、ジュネーブ・モデルという言い方を私はよくしているのでありますけれども、スイスのジュネーブには国連機関が十五、本部を持っています、そこに年間四十万人の国連関係者が訪れ、情報密度の高い国際中核都市となっております。ジャーナリスト、学者が絶えずジュネーブを訪れざるを得ないような情報の基地を形成しているような町になっています。

したがいまして、私は、新しい新首都というのは、例えば日本が得意とする分野の国連機関などを誘致し、あるいはAPECの下部機関、アジア太平洋エネルギーセンターみたいなものを創設してでも新しい首都を訪れる人の質と量を高めるべきだという意味で、国際中核都市というキーワードを配置すべきだということを議論しております。

その他、日本らしい都市の創生ということを書いてございますが、あくまでも、東京は、欧米模倣型の近代都市、特に戦後の昭和三十年代以降に東京に集中した人口を支えるために国道十六号線の外に急遽団地とか住宅地を開発してつくったプレハブ的都市という性格をどうしても持つておるのであります。

そういう、西欧近代模倣型の都市というものを脱却して、そろそろ日本の知恵に裏づけられた、文化、伝統に根差すユニークな都市、ここでは伊勢神宮のごときイメーজの森に沈む町なんという表現をとっておりますけれども、日本が蓄積してきた技術とエンジニアリング力を駆使してそういう都市の建設に立ち向かってみるなんというのも、閉塞感あふれるデフレスパイラルのような状況の中においてはチャレンジに値するテーマではないのかと思っております。

イタリアのベネチアは水に浮かぶ町として世界に個性を放っておりますけれども、私は、日本も独自の文化に立つ、日本は集積された技術と資金力を集中して極めて個性的な新しい都市空間をつくり始めたぞというようなメッセージが世界に発信されても大変意味のあることではないかなというふうに思っております。

それから、東京の一極集中は正の新たな視点ということでありませけれども、これは、先ほども申し上げたように、阪神・淡路、それから九・一というものを経まして、やはり分散を通じた安全性の確保というのはこの国にとって極めて重要なテーマになってきていると思えます。

それから、国際都市間の競争というものを冷静に比較してみましても、平均の通勤時間が二時間を超えるようなサラリーマンにとりまして、やはり創造的な人生の設計などなかなか難しい。やはり、集積のメリットが明らかにデメリットによって凌駕されている。実は、東京の効率性と魅力を高めるためにも、ニューヨーク、ワシントンというものをにらんでいて、私、特にそう思いますけれども、分散というものへの努力がこれから不可欠になるのではないかと思っています。

先ほど言いかけた人口の構造の変化を見ていると、